

を概念へと関連づけるその判断力の能力と比較することなしには、けして生ずることはないからである。今やこの比較において、（ア・プリオリな直観の能力としての）想像力〔構想力〕は（概念の能力としての）悟性へと与えられた表象によって意図的でなく、一致させられて、そしてそのことによって快の感情が目覚めさせられるならば、そのとき対象は反省的判断力にとって合目的とみなされなければならない。このような判断が客観の合目的性に関する美感的判断であり、この判断は対象に関するどんな存在の概念にも基づかず、また対象に関するいかなるいかなる概念をも得させない。対象の形式（感覚としての対象の表象の実質ではなくて）がその形式についてのたんなる反省において（その対象から得られるべき概念を意図するのではなく）、このような客観の表象にそくして快の根拠と判断され、そのような表象とこの快がまた必然的に結びつけられたものとして判断され、従ってこの形式を把握する主観ばかりでなく、あらゆる判断をする者一般にとっても、結びつけられたものとして判断される。そのときこの対象は美しいといわれる。そしてこのような快によって（従ってまた一般的に妥当して）判断する能力は、趣味といわれる。というのはそのとき快の根拠は、反省一般にとって対象の形式においてのみ置かれているのであって、いかなる対象の感覚のうちにもなく、またなんらかの意図を含んでいる概念との関連にあるものでもない。すなわちそれは主観における判断力一般の経験的使用における合法則性（想像力〔構想力〕の悟性との統一）でしかなく、その諸条件がア・プリオリに一般的にあてはまる反省において、客観の表象がこの主観と調和するのである、そしてこの対象と主観の能力との調和は偶然的であるのだから、この調和は主観の認識能力に関して対象の合目的性の表象をもたらすのである。」

（1992年 5 月11日受理）

いるように思われる。はっきりしていることは、そのように理解するほうが、目的論的判断力においても美感的判断力においても、より明確になるということである。つまり合目的性が踏まえている諸認識なり、対象の形式、あるいは諸能力に影響を与える、とみたほうがわかりやすいのである。まだこれを十分に確証にするにいたっていないが、これを「反省」の第二義的な意味として、ここに述べておく。

注 (1)拙論：カントの第一版における「純粹悟性概念の演繹」〔鹿児島県立短大「人文」(第4号)1980年6月〕を参照。

(2)この箇所を引用しておく

「それだからまた判断力は、ア・プリオリな原理を自然の可能性のためにもっているが、主観的な点において、自己自身のうちにもっている。判断力はそれによって、(自律としての)自然にある法則を指示するのではなくて、(自己自律としての)判断力自身にある法則を指示する。それは自然について反省するためである。この法則は自然の経験的法則に関する特殊化の法則と呼ばれるが、判断力はこの法則を自然に即してア・プリオリに認識するのではない。かえって、判断力が自然の一般的諸法則に関してなす区分において、もし判断力がこの一般的諸法則に特殊なもの多様なものを従属させようとするならば、私たちの悟性にとり認識可能である自然の秩序のために、この法則を想定するのである。それだから、自然がその一般的な諸法則を特殊化するのは、私たちの認識能力にとっては合目的性の原理に従ってであり、すなわち、知覚が悟性のために提供する特殊なもののために、一般的なものを見出し、(各々の種にとってなるほど一般的なものであるがそれを)雑多なるものとして、再び原理の統一において結合を見出そうとする原理の必然的な働きにおいて、人間悟性と適合するためである。というならば、そのことによって自然にある法則を指示するのでもなければ、観察(なるほどこの観察によってあの原理は確かめられうるのではあるが)によって自然から原理を学ぶのでもない。なぜならば規定的判断力の原理ではなくて、反省的判断力の原理だからである。すなわち、望まれていることはただ、自然が一般的な諸法則に従ってどのように整えられようとも、あくまであの原理〔合目的性のこと〕と、その原理に基づく諸格率に従って、その〔自然の〕経験的な諸法則を追跡しなければならないということだけである。というのは私たちはあの合目的性の原理が生ずる限りにおいて、経験における私たちの悟性の使用と共に、おし進めていくことができ、そして認識を得ることができるからである。」

(3)この箇所を引用しておく。

「ある一定の認識に到達するための直観とある概念との関係ではなくて、直観によるある対象の形式がただ把握すること(apprehensio)と快とが結びつけられるならば、表象はそのことによって客観に関連づけられるのではなくて、主観に関連づけられている。そして快は客観と認識諸能力との適合にはかならず、その認識諸能力は反省的判断力において、戯れており、die [Erkenntnisvermögen] in der reflektierenden Urteilkraft im Spiel sind そして諸能力がその反省的判断力のうちにあるかぎり、それだからたんに主観的形式的な客観の合目的性をいい表わしているにすぎない。というのは、想像力〔構想力〕へと諸形式を把握することは、反省的判断力が、また意図的でなく、その諸形式を少なくとも直観

概念の直観化の方向への想像力〔構想力〕の働きによって、創造されるということである。カントに従えば天才とはこのような理性概念をもちながら同時に直観化するのに才能を発揮する人といえるかもしれない。つまり理性概念を天性のものとしてもつばかりでなく、その理念を具体化するのに才能を示す人とも解されるからである。

私たちはふたたび「序論」に戻ろう。今や「意図的でなく」unabsichtlichを説明していこう。美に関する合目的性を構成する要素はようやく明らかになった。それら構成要素とは対象の諸形式であり、それを直観から概念へ、あるいは概念から直観へと橋渡しする想像力〔構想力〕であり、美感判断が一般性を要求しうる限りで悟性にもとづく概念であり、さらにも一つ、超自然的なものにかかわる理性概念とである。しかしそれらの間におけるメカニカルな関連にはカントは全く言及していないのである。わずかに直観から概念へ、あるいは概念から直観へと機能する想像力〔構想力〕を述べているにすぎない。しかもその想像力もそれがかわる概念とは悟性の概念なのか、直接的に理性なのか明確ではない。それはすでに述べたように、美の問題に関しては、認識問題のように概念規定ができない領域に入りこんでいるのがその理由であった。ここが、目的論的判断力の合目的性と根本的に異なる点なのである。そしてunabsichtlichとは、それでもなお、それら合目的性を構成する諸要素間の関連を一般的に表現している言葉なのである。それは、目的論的判断力における合目的性を考えてみれば、より明確になろう。目的論的判断力において合目的性は原理として、格率として機能する。諸認識はその原理のもとに整理され、秩序づけられ、そこに合目的で統一的な関連が見い出されるのである。その限りでは合目的性は意図的に形成される。それに対して、美感的判断力における合目的性は、その逆である。合目的性はけっしてその構成要素を合目的にもたらそうとするような原理として働くのではなく、要素が互いに意図的でなく結びつくことによって、達成されるものなのである。なぜなら私たちに知られているのは合目的性をもったものとして、諸要素が関連したときだけであり、知るのはその結果である。そのときそれを私たちは快（ないし美）と感ずるからである。だからどのような関連の仕方が合目的性をもたらすのかは私たちには知られていない。それは概念によって規定しえない領域の問題だからである。ただ明らかにいえることは、目的論的判断力におけるように、合目的性の原理によって意図的になされるのではない、ということなのである。これがunabsichtlichの意味なのである。

最後に「反省」ということに関して一言述べておきたい。すでに「反省」ということに関しては次のように述べておいた。目的論的判断力においては諸認識を踏まえること、美感的判断力においては、対象の諸形式を土台にすえること、そのことが「反省」であると。確かに第一義的にはそうである。しかしさらにもう一つの意味があるように思われる。それは、合目的性の概念に関連する。合目的性の概念にはもともと、フィードバックする意味合いがこめられている。つまり目的にあうように最初に踏まえられているものが再びとらえなおされるとの意味がある。どうもカントのいう「反省」には、この意味も含まれて

している（²⁴⁰_{C418}）ことである。主観的形式的合目的性を構成する想像力の表象が説明できない表象であり、またその理性概念が説明することのできない概念であるのだから、私たちの説明しようとする合目的性は、説明できない想像力の表象と論証することのできない理性概念をただ設定しているだけということになる。もっと簡単にいえば、合目的性の中味をメカニカルに説明するということとはできないということである。ただいいうことは直観を概念化し、あるいは概念を直観化する想像力〔構想力〕がなんらかの仕方で機能するということ、それは直観を概念化するときと与えられる直観とは対象の形式であって認識の内容となりうるものではないということである。そしてまた同じように設定された理性概念は超自然的なものにかかわるが、この理性概念はまた、美感的判断の一般性を要求することができるかぎりでなんらかの悟性の概念にもかかわりをもつものと考えられることだけである。しかし私たちはどうしてカントがここにおいて理性概念といったものを想定しようとしたのかを知りたい。すでにカントは感官の対象の根底に、物自体として超自然的なものを考えていた。それは現象と物自体をカントが理論上どうしても区分する必要がある、それなしには私たちはアンチノミーにまきこまれるからであった。とすると同じ論法で、どうして合目的性における概念を超自然的なものにかかわる理性概念としたのか、どうしても問わないわけにはいなくなる。それに対する回答はこうである。ここでは詳細に述べることはできないが、結論だけをいうならば美に関する合目的性における概念を悟性概念とすると、アンチノミーにおちいってしまうというのがその第一の理由。そしてそのアンチノミーを避けるには、理性概念とする必要があったのである。しかしそれをさらに超自然的なものにかかわる理性概念とした理由は何か。カントはこの理性概念にいくつかの基本的性格を付与する。ここでは必要最小限にとどめて、そのうちの二つの特色づけでがまんしておこう。まずその一つは、この理性概念に「美感的意味における精神」といったものを付与していることである。あるいは「心のうちに生命を与える原理」das belebende Prinzip im Gemüteともいっている。または、この原理こそ心の諸力を合目的に活力たらしめるもの（¹⁹²_{C349}）としているのである。人がもしここだけを強調して理解するならば、美感的判断力のすべての中心は、まるでこの理性概念にあるかのようである。なぜならば、私は今まで、対象の諸形式と主観的諸能力との合目的性をいい、それは単純化すれば直観と概念の合目的性として述べてきたのであった。しかしここをみると直観を踏まえ、それを合目的性たらしめるもの、美を美たらしめるものは、すべてこの理性概念に含まれてしまうかのような表現だからである。それを受けたかのようにその第二の特色づけはこうである。この原理は美感的理念を描出する能力以外のなにものでもない、とカントは主張する（¹⁹²_{C389}）。すでに述べたように芸術の創造が天才の所業であるとするならばまさに天才とは、この理性概念を生まれながらにして保持している人ということになりそうである。少なくともいえることは、芸術の創造は、この理性概念から出発し、直観の概念化への方向への想像力〔構想力〕ではなくて（このときは芸術の観賞の描出となる）、

象の形式はある特定の自然、あるいは特定のものでよく、従って、それらは認識の結果として与えられたものでもいいのである。その限りでは認識されたものをさらに踏まえて、そのなかから、美感的判断力に適うような仕方で、つまり合目的性を形成するような仕方でその対象の形式が与えられたものとして、直観のうちに受けとられるのである。これがまさに美感的判断力における「反省」なのである。従って「反省」とは認識の対象であるものであれ、それを踏まえはするものの、合目的性を形成するような仕方で、それらすべての対象から、ある種の対象の形式を選びとるところにその本質があると考えられるのである。そのときこの「ある種の対象の形式」とは認識の場合のような、客観的对象そのものとは基本的に異なったものなのである。それでは認識とは基本的に異っているということとをさらに説明しておこう。カントは少なくとも「序論」においては、美感的判断力における合目的性を主観的といい、形式的といい、そこにおける直観と概念は、認識のそれとは異なったものであると消極的にいつてきたにすぎないからである。私たちは「序論」を離れて、その結論を他に求め、そのことによって、この主観的形式的合目的性の仕組みを究明していこう。それはまだ残されているこの合目的性の特異なものの第二点 *unabsichtlich* を説明するためにも必要なことなのである。

結論を急ごう。まず第一にカントが述べていることは、認識問題を議論するときのように、美感的判断に関しては議論できないということである。なぜかという、美感的判断は概念を根拠としていないために、概念によって説明することは基本的にできないのである。それでは全くできないかというそうではなく、たとえばすでに述べたように、美感的判断は一つの個別的判断ではあるが、一般性を要求しうるとした。それはまた概念（つまり悟性）にこの概念があるとも述べてきた。その限りでは私たちはある美感判断に関して、論争することはできるのである。実はこれが趣味判断に関するカントのアンチノミーの提示の大まかな解決（²³⁴⁻²³⁶_{C414-416}）なのである。

このアンチノミーの解決から、いくつかのことが帰結する。その一つは美感的判断力の合目的性において機能する概念は、純粹理性概念としていることである。悟性による概念でなくて、理性概念であるから、この概念は直観によっては全く規定されない概念であり、この概念によってなにごとも認識されず、なんの証明もなされない。つまりこの概念は超自然的なものに関する理性概念で、それは感官対象の基礎にあるもの（²³⁶_{C416}）だとしていることである。このことは内容的に言えば美の本質が基本的に説明されえない側面をもつ一方、なにか超自然的なものにかかわりをもつものであること、そしてそれが美の本質にかかわりがあることを示しているものと考えられる。美の本質が基本的に説明されえないとする点に関して、カントはさらに次のようにもいう。美に関わる主観的形式的合目的性を形成する想像力〔構想力〕の表象を「ある説明できない想像力の表象」 eine *inexponible Vorstellung der Einbildungskraft* とし、さらに同じその合目的性を形成する理性概念を「証明することのできない理性の概念」 ein *indemonstrabler Begriff der Vernunft* と

一コマの映像の結合としてのダンスではなく、連続的な働きのうちにみられる美しさ、といったものを述べたかったに違いない。それはとりわけ、諸感覚の戯れとしての音楽（作曲）に端的に示めされているといえる。そこでは明らかに連続的であることが基本的な前提条件であり、曲における音と音との間がひどく離れていてはどんな名曲も意味をなさないからである。それではこの「連動的な働き」によって生ずる美しさをどのように表現したらいいのだろうか。ダンスの美しさは一コマ一コマの映像によって十分その美しさがとらえられるというのであれば、今までの快の根拠としての合目的性による説明で十分である。しかしいま私たちは、それでは十分でなく、まさに「連続的な働き」そのものの美しさが問題であることを述べたばかりであった。この「連続的な働き」のもつ美しさを説明するものこそ、認識の諸能力が反省的判断力において、戯れている、という事態なのである。一言いえば、「認識の諸能力が反省的判断力において戯れている」とは「連続的な働き」のもつ美しさの根拠を示す表現なのである。しかしこれは次のようにも考えられないだろうか。「連続的な働き」のもつ美しさとは何か。いまそれを私たちは認識の諸能力が戯れているといった。これはまた次のようにいえないだろうか。「連続的な働き」の美しさは美しさの根拠である合目的性に自由度があるかであると。合目的性を形成しうる対象の諸形式と諸能力の適合の自由度がこの「連続的な働き」の美しさの根拠であると。これはまた、美観的判断力のもつ一般性が弱いものの根拠にもなる、との一面をもつことになるのではあるが。そしてこの戯れの主役こそ直観へ、または概念へとゆれうごく想像力〔構想力〕と考えられないだろうか。ところでここにおける認識の諸能力とは何か。今まで述べてきたことから、すでに明らかであろう。対象の諸形式を受け取る直観がまずあって、その与えられた直観から概念へともたらず中間項としての想像力〔構想力〕があり、さらに概念において働く悟性こそがそれら諸能力である。その諸能力が反省的判断力のうちにあるとは対象の形式である直観と、それを概念にまでもたらず想像力がうまく機能して合目的性を形成していることを意味している。その諸能力のうち、想像力のことはすでに述べた。これは二通りに働く。与えられた概念を直観へと抽象化する働きとしての概念化と、逆に概念としてもっているものを具体的なものとして、つまり直観的に具体的に示そうとする直観化の二つの働きである。芸術の鑑賞は想像力〔構想力〕の概念化として働き、芸術の創造（創作活動）に関しては想像力〔構想力〕の直観化として働くのであろう。すでに述べた概念に従えば前者が芸術の鑑賞における「描出」であり、後者が、芸術の創造による「描出」である。しかしカントによれば、芸術の創造は基本的には天才の所業（¹⁸⁷⁻¹⁸⁸_{C386}）ということなのである。従っていまの私たちは、芸術の鑑賞の面のみを考えていけばよい。そうすれば私たちは、ここでの議論を単純化して述べることができる。つまり「反省」とは、次のように述べるのであり得るのである。自然の景色であれ絵画であれ、それが対象の形式として与えられていること、それを踏まえて、想像力と悟性が合目的に適合したときに、その自然なり絵画が美しいといわれるのである。そのとき、その対

根拠としての合目的性でしかない、と述べたのであった。以上のことを踏まえ、さらにその特異性に目をむけていこう。

この美感的判断力における合目的性の特異性に関して、二点が指摘できる。第一は、快が客観（つまり対象の形式）と主観（つまり認識の諸能力）との適合によるものであると述べたあとに認識諸能力に関してそれ「認識諸能力」は反省的判断力において戯れているdie [Erkenntnisvermögen] in der reflektierenden Urteilskraft im Spiel sind^(XLIV C259)といていることである。つまり対象の形式と主観である認識の諸能力との適合により快が生ずるとき、そのとき認識諸能力のある状態を述べているのである。この諸認識が戯れてim Spielいるというのが、第一点である。これは一体何を意味しているのであろうか。次に、想像力「構想力」へと対象の諸形式を把握することが行われるのは、反省的判断力がその諸形式を少なくとも、直観を概念へと関連づける、判断力の能力と比較することによってである、と述べた箇所、その比較が「意図的でなく」unabsichtlich行われるとしていることである。ここでは反省的判断力が対象の諸形式をその判断力の能力と比較するときに、unabsichtlichなのである。そしてまた、この比較において、想像力「構想力」が悟性へと与えられた「対象の形式の」表象によって一致させられるときにそこに快が生ずるのだが、その一致させられるときもunabsichtlichなのである。そのときのunabsichtlichとは何であるのかがその第二点である。

対象の形式と主観である認識諸能力との適合により、快が生じるときの、この諸認識が反省的判断力において「戯れている」という状態に関する説明は少なくともこの「序論」にはなにもない。いきなり、ここに諸認識が戯れているim Spiel sindと出ているだけである。だからこの説明をしようとするならば、第一部の「美感的判断力の批判」の部分を採用しないわけにいかない。しかもこのSpielという概念は、美観的判断力の主要な概念の一つで、随所に現れる。ざっとみたところでも^(28 C287)、^(42 C295)、^(211-213 C400-401)、^(233-226 C407-409)である。そのうちでもSpielの特色をもっともよく表していると思われる箇所^(42 C295)を中心にこの状態が何を意味しているのかを述べておきたい。

感官の対象のすべての形式を形態Gestaltか、戯れSpielかであるとしたあとで、後者の例として、諸形態の戯れSpiel der Gestaltenと諸感覚の戯れSpiel der Empfindungenをあげている。前者は空間における戯れであり、演技やダンスがそれに属する。後者は時間における戯れで作曲がこれに属す。また前者の例としてカントは素描die Zeichnungをあげているが、恐らくこれは描き終ったものとしての素描でなく、描きつつある素描をカントは考えていたのであろう。ここで述べられているSpielとは、空間的Spielであれ、時間的Spielであれ、さらにまた諸形態の戯れであれ、諸感覚の戯れであれ、一言でいえば「連続的な働き」を表現したかったのであろう。なるほどカントが諸形態の戯れといったところのものは、映画のフィルムを比喩的に使用すならば、例えば、ダンスは一コマ一コマの映像に分解できるかもしれない。しかしカントがここで述べたいのは、そのような一コマ

(2) に対応するのである。従って以上のことから明らかなことは、反省的判断力における「特殊なもの」とは、基本的には悟性によって与えられた諸認識であり、「一般的なもの」とは、究極的には合目的原理に従って求められた統一体ということになるだろう。しかしその間には常に「特殊なもの」と「一般的なもの」の関係が存在する。より一般的なものを「特殊なもの」として、それよりさらに一般的なものを「一般的なもの」とするということがたえず生ずるからである。そのかぎりでは、反省的判断力とは絶えずより「一般的なもの」を求める働きと考えたほうが実情に合致するだろう。だから究極的に合目的原理に従って求められた統一体といったものが固定的に存在するのではない。(その1)ですでに述べた条件の(4)は、合目的性が果たしてどこまで拡大されるかとの適用範囲に関して、それは全く無規定的unbestimmtである (XL I_{C257}) こと、判断力はこの原理の及ぶかぎり、この原理をおしすすめることを命ずるものであって、限界を規定することは不可能である (XL I_{C257} - XL II) ということは、目的論的判断力としての反省的判断力にも本質的な性質なのである。それではそれに対して、美感的判断力としての反省的判断力とはどのようなものであるのか。

すでに私たちは、美感的判断力における合目的性が、目的論的判断力の合目的性と比較してかなり異質なものであることを、おりにふれて言及しておいた。今や、その合目的性の異質的な部分に目をむけていかなければならない。それはまさに合目的性の仕組み、構造そのもののうちに、その異質であることの根拠が存在するのである。そのことをより明確にするためにこれから述べることも含めてすでに(その1)で述べたことをも一度整理しておこう。その箇所は引用しないが、その典拠は (XL IV - XL V_{C258-259})⁽³⁾ である。

美感的判断力における合目的性は、直観により対象の形式と主観における諸能力との間に構成される合目的性である、ということであった。そしてこの合目的性が「形式的」といわれたのは、合目的性の素材(構成要素)となる対象の形式が認識のように実在的な表象が重要なのではなく(認識の結果が美の対象となることはあっても)、その対象のなんらかの形式であればいいので、それは必ずしも実在の真の表象である必要が無いとの意味でいわれていた。そして「主観的」とは、その対象の形式が私たちの認識能力にかかわることを意味すること、そしてその認識能力とは直観を概念へと関連づける想像力[構想力]が重要な意味をもつことを示した。つまり想像力[構想力]は概念を直観化すること、あるいは直観を概念化する能力としても機能するものであった。その意味で、美感的判断力の合目的性を私たちは「主観的形式的合目的性」としてとらえたのであった。そのさい私たちはこのような合目的性がどんなに特異なものであったかを述べた。つまり目的論的判断力においては実在的な対象としての自然一般に、合目的な関連を見いだすという限り、対象(自然)そのもののうちに合目的性が見いだされるのに対して、この合目的性は、その結果として私たちが快(あるいは美)を受けることはあっても、その関連そのものの合目的性が直接与えられているわけではないことである。つまりそれは快(ないし美)の説明

実践理性の命令のように単に法則を指示するでもなく、また悟性による規定的判断力のように観察によって自然から、その合目的性の原理を学ぶといったものでもない。しかし観察によってこの原理が確かめられるということはある。このようなものが反省的判断力の働きだとカントはいうのである。このカントの説明はやや歯切れが悪い。それは必ずしも、統一が成功しない場合も十分に考慮にいられて叙述されているからである。そこで私たちは、説明の単純化のために上記のカントの説明を統一に成功した説明として理解していこう。そうするとカントの主張は次のようになる。まず第一に、やや人為的な表現になるが「一般的なものの」の立場からいえば、合目的性の原理が成立したということは統一に成功したことを意味し、そのときその合目的性の原理に従って、特殊化の原理が機能し、最初から与えられている悟性による諸認識をふまえた、より高次の認識との間に従属関係が成立したことを、つまり統一的な秩序が成立したことを意味する。次に「特殊的なもの」の立場からいえば（これがまさに反省的判断力の基本的な働きなのであるが）、次のようになろう。与えられている特殊なものとは悟性による諸認識。しかしこれらは自然全体という観点からみれば、なんら統一的なものではなくただバラバラな特殊な諸認識でしかない。そこで、それら諸認識間により一般的な諸認識が求められ、さらにより一般的な諸認識が求められ、最後にもっとも一般的なものとしての合目的性の原理に基づく統一が求められるわけである。このとき高次の一般的なものを求めるさいに働くのが、合目的性の原理に従った特殊化の法則なのである。というのはより高次の一般的ものは諸認識間の共通点に目をつけ、ただまとめられるものをまとめていくといった無目的なものではない。それは最終的に統一をもたらすような仕方では、諸認識間の従属関係が成立していなければならない。そのかぎりにおいて、合目的性の原理に従った特殊化の法則による諸認識の区分が重要な意味をもってくる。つまりより高次の認識は、いわば合目的性に従った特殊の法則を想定することによって求められることにより、最終的には合目的性の原理に適した統一へと到達することができるからである。これがカントの考え方と解される。もっと簡単にいえば、反省的判断力が働いたということは合目的性の原理に従って統一が求められたことを意味し、「反省」とは、その統一の立場からみれば、間接的に悟性による諸認識をふまえていることを意味する。そしてこの諸認識をふまえること、すなわちそれを反省することなしには、合目的性の原理による、なんらかの統一をも生むことはできないのである。ところで、反省的判断力が機能しなくなった場合はどうなるか。それは諸認識のうちに異質なものがあって、合目的性の原理に基づく統一へとをもたらすことに成功しなかったことを意味する。カントにいわせると私たちには諸法則の異質性につきあたり、この異質性が特殊な諸法則を一般的な諸法則の下に一致させることを、私たちの悟性に対して不可能にさせること、いいかえれば、このことは主観的で合目的な自然の特殊化の原理に逆らっていること、そして私たちの反省的判断力の原理にも逆らっていること（^{XL I} C257）だという。これは（その1）ですでに述べた合目的性一般としての四つの点のうち、条件

として自然はこの原理に従うべきものとすることはできない。かえって自然の諸法則に従って成り立つ反省は、自然に従っているものといえるからである。この一つ目と三つ目の問題、つまり反省的判断力において中心的役割を果たす原理、つまり「合目的性」が超越論的原理であり、かつ経験的原理ではないことはすでに（その1）で詳しく述べた。だから私たちはさきの反省的判断力の定義と二つ目の要点とをふまえて次のように問えばいいことになる。反省的判断力における特殊的なものは具体的に何か。あるいは一般的なものとは何か。それはどうやらカントが経験的なものと呼ぶところのもの、そして、より高次の原理と呼ぶものに対応すると思われるが、それは目的論的判断力、および美感的判断力においては具体的に何を意味するのか、と問うことになる。「合目的性」はいわば「特殊なもの」と「一般的なもの」を、あるいは経験的なものとより高次の原理とを結びつけるいわば統一的全体を表す形式的な概念なのである。従って私たちが「特殊なもの」と「一般的なもの」あるいは経験的なものとより高次の原理は具体的に、両判断力において、具体的に何であるのかを問うことは、すでにそれぞれの「合目的性」の仕組み、あるいは構造を問題としていることになるのである。以下、私たちはまず目的論的判断の合目的性の仕組み、次に美感的判断力の合目的性のそれに言及していこう。そこにおいて私たちははじめて反省的判断力の意味が明確になり、そこでまた「反省」の概念が明らかになるだろう。

合目的性の概念はすでに述べたように目的論的判断力、および美感的判断力の双方において働く基本的概念であった。とくに目的論的判断力においてはそれは超越論的原理として機能することを（その1）で述べておいた。従って、反省的判断力が特殊なものから一般的なものを求める働きとするならば、特殊なものとは基本的に悟性による諸認識であることは確実である。そしてその一般的なものはこの「合目的性」の原理そのものであるといいたいくなる。確かに合目的性は少なくとも形式的にはこの目的論的判断力におけるもっとも一般的なものということができる。しかしカントは実際にはもう一つの超越論的原理を、この目的論的判断力に関して言及している。それをカントは自然の特殊化の法則 *das Gesetz der Spezifikation der Natur* と呼ぶ。カントの説明そのものはやや人為的であるが、以下この法則を含めて、この箇所⁽²⁾（XXXVII-XXXVIII
C254-255）を要約し、説明を加えておこう。

この法則の役割は次のことにある。カントによると判断力が特殊な多様なものを一般の諸法則のもとに従属させようとするときは、つまり自然の秩序を獲得するために判断力が自然の一般的諸法則に関してなす区分において、この法則を想定するのだという。そしてこの特殊化の法則が機能するのは合目的性の原理に従って行われるのであり、このことは次のことを意味する。つまり、悟性によって与えられた諸認識（特殊なもの）をもとに、より一般的なものを見い出し、そのより一般的なものを再び特殊なものとして、原理の統一を求め、再び結合を見い出すということを意味する。このようなとき、判断力は実

の一般的なものに包摂する判断力（また、もしその判断力がア・プリオリな判断力として諸条件を挙げて、その諸条件に従ってあの一般的なもののもとにのみ、包摂されうるならば、その判断力）は、規定的bestimmendである。しかし特殊なものだけが与えられていて、そのために判断力が一般的なものを見い出すべきであるときには、その判断力はただ反省的reflektierendである。」（^{XXVI}_{C248}）一般に判断力とは、特殊なものを一般的な下に含まれている考える能力。そのとき、一般的なものがなんらかの仕方、たとえば規則としてあるいは原理、法則として与えられていれば、その能力は特殊なものをその一般的なもののもとに含まれていると思考することができ、そのような判断力は規定的判断力。それに対して、一般的なものは与えられておらず、特殊なものだけが与えられていて、逆に、その特殊なものから一般的なものを求めようとするとときに働く判断力が反省的判断力ということになる。だから、簡単にいえば、（カントも上記の引用ののちにそのことを説明しているが）規定的判断力die bestimmende Urteilskraftとは第一批判でとりあつかった悟性概念であるカテゴリーがそれに当たる。なぜならカントによると、カテゴリーはそれ自身で一般性と必然性をもつア・プリオリな原理だからである。それに対してカントは、反省的判断力die reflektierende Urteilskraftに関して次のようにいう。「自然における特殊なものを一般的なものへと上昇すべき責任をもつ反省的判断力は、それだから、ある原理を必要とするが、それは経験から借りてくることはできない。というのは、その原理はまさに、あらゆる経験的諸原理の統一を、同様に経験的ではあるが、しかし高次の諸原理のもとに基礎づけ、そしてそれだから、それら経験的諸原理〔経験的諸原理と高次の諸原理〕を相互に体系的に従属的秩序づけする可能性を基礎付けるべきだからである。それゆえ、このような超越論的原理を反省的判断力は規則として自分自身に与えることができるが、他のところからとってくることはできない。（というのはそうでないところの判断力は規定的判断力になってしまうから）さらにこの原理を自然に指示することもできない。というのは自然の諸法則に関する反省は自然に従っており、自然は諸条件に従っているのではないからである。その条件とは私たちがその条件に従って、その諸条件に関しては全く偶然的な自然の概念を求めようと努めているものではあるが。」（^{XXVI-XXVII}_{C248-249}）この引用の要点だけを述べよう。反省的判断力は、ある原理を必要とすること、しかしその原理は経験から借りてくることはできない。つまり経験的原理ではないということがまず一つ。二つ目はその原理の性格は経験的諸原理を統一するものであり、従属関係で結びつけ、一つの秩序ある全体となるようなものであること。これはカントがそのあとで述べること（^{XXVII}_{C249}）から、その原理が「合目的性」であることが明らかである。だから「合目的性」とは、経験的なものとより高次の原理による従属関係を示し、かつ一つの秩序をもつ全体をなしていることを意味する。三つ目はこれが超越論的原理であること、だからこの原理を自然から得られたもの、つまり経験に基づくものとすることはできない。そうするとこの判断力は規定的判断力になってしまう。また〔実践理性のように〕理性の命令

省的判断力とは、規定的判断力ではないが、一つは統制的原理に基づき、も一つは弱い意味における構成的原理にも基づくところの、一つのある特殊な概念であるということになる。このように微妙で、特殊な概念であることが、長い間、第三批判を理解するうえで、私自身苦慮してきたことを告白しないわけにはいかない。そしてまた、第三批判を必要以上に難解な書物となっている原因の一つも、ここにあると思われる。カント自身の規定的判断力と反省的判断力そして判断力一般の定義（^{XXVI}_{C248}）そのものは実に明解である。私の経験によるとあまりにも明解であるがためになにか理解したような気分になり、第三批判を読みすすむうちに結局、その定義を理解していなかったことに気づいたのであった。私たちはカントのこの定義から入り、判断力の概念の解明をすすめるが、その前に今までの要約と共に一種の大まかな結論を述べておこう。

カントが第一批判でとりあつかった自然の領域と、第二批判でとりあつかった自由の領域を結びつけるものとして合目的性の概念を考えた。これによって自然の領域も自由の領域もバラバラなものではなく、連続性をもったものとして示されるからである。その限りでは自然と自由の橋渡しの役割をした判断力による合目的性とは、統制的原理によるものであり、その合目的性の概念は、統制的原理の応用の一つであるといつてよいと思う。あるいは本質的には統制的原理そのものといつてよい。しかしおそらくカントは合目的性の概念から、さらにそれによって説明されるものとして「美」の問題（快の根拠として）を思いつくにいたったに違いない。これは、古くからの哲学の基本概念、真、善、美に対応し、美の問題は説明されぬままにしておいてよいというものではないからである。それがすでに（その1）の最初に示された「表」なのである。だからそこでは自然の領域と自由の領域を結びつけるといった考えから出てきた目的論的判断力は「表」には出てこない。かえって「美」のことが「表」にでていたのである。他方カントは目的論的判断力も美感的判断力も「合目的性」の概念によってまとめることができるとした。つまり、判断力という能力が一方では悟性と理性の中間能力にあるということを説明しようとしながら、他方では「合目的性」という共通の概念によって、それぞれ説明しようと考えたのであった。しかし、その合目的性の概念だけで、この二つの目的論的判断力と美感的判断力を結びつけるには不十分と考えたのだろう。さらに両者に共通と思われる概念「反省」を指摘し、さらに反省的判断力の概念を定義づけ、両判断力の共通性を強調しようとするところに、その意図があったと思われる。（その1）ですでに述べたことであるが、筆者が第三批判において、目的論的判断力と美感的判断力の共通点をカントがあまり強調しすぎていること、それがいっそうこの本を難解にさせているといったのは、その意味である。

カントによる判断力、規定的判断力、反省的判断力の定義は次のとおりである。「判断力一般Urteilkraft überhauptとは特殊なものdas Besondereを一般的なものdas Allgemeineの下に含まれているものとして思考する能力である。その一般的なもの（規則die Regel, 原理das Prinzip, 法則das Gesetz）が与えられていて、特殊なものをそ

する基準を、カントは示しているとは思えないからである。ただすでに（そ
たことではあるが、美感的判断における一般性を主張していたことは確かであ
ここで述べていることは、経験の進展により、あるいは時代が進むにつれて、そ
そのものが変化するということでもある。もっとも美感的判断における一般性の私
識における一般性のように、強力なア・プリオリ性をもつものではない。いわば間接的な
ア・プリオリ性を主張したにすぎない。もともとア・プリオリ性を主張しうるのは、カン
トによると悟性の働きによるもの（ C_{236}^V ）であった。それに対して美感的判断において
は、認識とは違って、主役は想像力〔構想力〕である。この想像力が悟性となんらかの仕
方でかかわる限りにおいて、ア・プリオリ性が主張され、一般性が主張されるのであった。
だから美感的判断においては、弱い意味でのア・プリオリ性であり、一般性でしかないの
である。この弱い一般性しか主張されえないということは、美感的判断力の一つの特色で
ある。それはまた快・不快そのものが変化するというところに一つの根拠があるのかもしれ
ない。これはまた次のことに由来するかもしれぬ。カントの理論に従えば条件（４）が
その答えの一つだと考えられるのである。なぜならば、条件（４）の「合目的性」はどこ
まで拡大されるかとかとの適用範囲に関して無規定的であるということ、それは限界を規
定することはできないこと、逆にいえば、経験的分野においてどこにでも「合目的性」を
形成しうる自由度をもっていることを意味する。美感的判断において「合目的性」に自由
度があるということは、合目的性が快の根拠であるかぎり、無限の快あるいは美の世界がひ
らかれていることを意味する。美には一般性があるといいながら、基本的には「合目的性」
を形成しうる無限ともいえる自由度をもつということこそ、美感的判断のも一つの特徴な
のである。私たちは、次の反省的判断力の項において、美感的判断に関しそれが想像力
〔構想力〕の戯れSpielのうちにその一つの本質があることを示すことになるろう。

「反省的判断力」die reflektierende Urteilskraft

反省的判断力という語がででくるのは第三批判で、その反省的判断力としてカントがし
めしているのは具体的には、美感的判断力と目的論的判断力のことである。これまでにわ
かったことは、美感的判断力は諸認識におけるようなア・プリオリな構成的原理に基づく
ものではないが、弱い意味における（悟性と間接的にかかわる限り）、ア・プリオリな構
成的原理に基づくものであった。そして目的論的判断力は、統制的原理に基づき、その
ア・プリオリ性けたふら支細にとるものではない。統制的原理としての統制力、

したとおりである。

第二は目的論的判断力では合目的性の概念そのものが重要であったのに対して、美感的
判断力においては直観と概念の双方に関わりをもつ想像力が重要な意味を持つことである。

このように、美感的判断力と合目的性の概念は、目的論的判断力とは違、合目的性で

念の描出とは芸術の創造ばかりでなく、自然美を含めて、芸術の鑑賞にもかかわる概念なのである。このような観点からすれば、私たちは次のように述べることができる。描出に関して、芸術の創造との観点からいえば、「描出」とは作品化することである。それは「ある対象に関してあらかじめ把握された概念を実現する」ことであるから、あらかじめ芸術家の頭の中にある。あらかじめもっている概念を、作品として具体化することである。そしてそれが美として評価されんとするならば「あらかじめ把握された概念」が、合目的性をもつものでなければならないのは当然である。そしてその作品がまた模倣でない限り、芸術作品の創造においてはつねに新しい合目的性の発見が要求され、描出とは新しい合目的性をもつものの表現なのである。その意味で、芸術家とは作品において常に新しい美の追求者、あるいは発見者ということになる。

他方、芸術の鑑賞の点からいえば、「描出」とは芸術作品を美しいと感ずること、あるいは自然の美しさを美しいと感じることに尽きる。それは作品をとおして鑑賞者のうちに合目的性をひきおこさせるからであり、それが美しいものを美しいとさせるのである。

(その1)で快の本質にかかわるものとして四つの点をあげた。その(3)は、経験が進むにつれて、不快が快となりうることもあること、つまり快・不快は個人の経験の進展により、あるいは時代の進展(歴史)と共に変化しうるものであること、そしてその(4)は快の根拠である「合目的性」がどこまで拡大されるのかとの適用範囲に関しては無規定的であること、いいかえれば経験的分野において、限界を規定することは不可能であるということ、であった。以下、この二つの条件と描出とを関連させ、まとめていこう。

「描出」とは芸術の創造の点からいえば、作品化であり、新しい美の発見である。芸術の鑑賞、および自然美を美しいと感ずる観点からいえば、それはそれらを美しいと感じること、そのことが「描出」となる。そのことは芸術作品であれ、自然そのものが対象であれ、鑑賞者その人の合目的性の発見であり、あるいは結果としての新しい快の発見という感情作用にいたる。このことを前述の条件(3)に結びつけるとどうなるか。経験の進展(個人の成長、あるいは時代の進展)により、不快が快となりうるのだから、個人のレベルにおいても、社会全体のレベルにおいても、当然美意識に変化が生ずること、またそれは当然である、ということになる。芸術の創作活動に関していうならば、またそれを社会全体のレベルに関していえば、美意識の変化は美の新しい発見、新しい美意識の追求という仕方で現れる。逆にいえば個人であれ、社会全体であれ、経験の進展があるからこそ、新しい美の発見があり、新しい美意識が形成される余地があるというわけでもある。経験の進展、時代の変化が快・不快そのものを変化させることにもなるからである。従って、新しい美の追求ないし発見は、とりわけ創作活動においては、一般的傾向として、今までにない様式や形式の追求という仕方で現れることにもなるだろう。そこには必然的にたんなる形式の新奇さや、こけおどかしの作品が入りこむ余地が出てくるところでもある。なぜなら、何が新しい美の発見なのか、あるいはただのこけおどかしなのかをはっきり区別

したとおりである。

第二は目的論的判断力では合目的性の概念そのものが重要であったのに対して、美感的判断力においては直観と概念の双方に関わりをもつ想像力が重要な意味を持つことである。それはどうやら美感的判断力の合目的性の概念が、目的論的判断力とは違った合目的性であるところにその原因があると思われる。それでは一体美感的判断力の合目的性とはどのような仕組みなのか。美感的判断において、カントはその判断の一般性を主張し、その根拠として、合目的性の悟性への関わりを指摘するが、その美感的判断力における、その合目的性とはどのようなものなのか、その構造が再び問われることになる。この合目的性のその仕組みに答えるキーワードの一つがまたのちに述べる「反省」なのである。この「反省」の意味によって、はじめて、とりわけ美感的判断力の合目的性の仕組みが明らかになる。これはのちに触れることではあるが、目的論的判断力も美感的判断力もカントはまとめて、反省的判断力と特色づける。それは「反省」の概念によって、主として第一批判でとりあつかわれてきた判断力とは基本的に異なることを示したかったからに外ならない。しかし今、私たちはこの問題を保留しておこう。すなわち、ここではまだ合目的性の仕組みそのものの議論には入らず、合目的性が成立することによって、何が結果するとしてでくるのか、ということに注目する。なぜなら、その合目的性から、結果するものこそいまここで取り扱っている「描出」の問題だからである。すでに私たちは（その1）の「合目的性」によって合目的性の一般的性格を述べることにより、この論文のテーマである判断力の問題にせまってきた。ここではその合目的性の成立によって結果することを述べることによってさらにその問題に近づき、さらに「反省」ということによってその合目的性の仕組みを考えることによって、「判断力」の問題を解明していこう。

結論を急ごう。今まで述べたことから美感的判断力における「描出」とは、あらかじめ把握された概念を実現する」であり、それはもっぱら芸術の創作活動における働きを示していること、すなわち、概念としてもっているものを作品化することが「描出」であるというわけである。しかしそれは実は一面でしかない。自然の美しさを美しい感ずること、また芸術作品を美しいとして感ずること、つまり鑑賞も、「描出」なのである。この箇所ではそのことは明確に述べられていないが、少なくとも自然の美しさを美しいと感ずることを「形式的（たんに主観的）な合目的性の概念の描出」と私たちはみなすことができる（^L_{C262}）とカントはいつているからである。ここで形式的（たんに主観的）とは、目的論的判断力における「描出」をいわば自然目的として「実在的（客観的）合目的性の概念の描出」としてみなしたことに対立させていわれている（^L_{C262}）のである。しかし他の箇所では（¹³¹⁻¹³²_{C352}）概念の描出の能力が把握の能力と同じものであることを述べ、自然の美しさに関して言及されているからである。この把握の能力をふえんすれば、それはたんに自然の美しさを美しいと感ずる能力であるばかりでなく、芸術作品を美しいものとして鑑賞することも、それに含まれているというのが私の理解である。従って、結論をいえば概

「構想力」が実際に作品化するうえで大きな役割を果たすことになる。すでに（その１）で述べたように美感的判断力における合目的性が表象と主観との関連によって生ずること、そこにおいてはカントの説明によれば感性と悟性の中間項としての想像力「構想力」が重要な役割を果たすことはその意味なのである。それでは芸術における作品化に大きな役割を果たすその想像力「構想力」とは何か。基本的にどのような働きであるのか一言述べておこう。

ほんらい想像力「構想力」の概念が、カントの思想に重要な役割として現れるのは、「純粹理性批判」の第一版、超越論的演繹においてである。この概念に関してはすでに筆者は詳しく論じている⁽¹⁾ので、ここではこの小論に関するかぎりでは、想像力「構想力」についてのカントの考え方をまとめておこう。まず基本的には、想像力「構想力」はいわば感性と悟性の中間的な能力として示されている（A124）。それは想像力「構想力」が、直観として表れるときには感性の能力と関連し、概念と結びつくときには悟性の能力に関連するといった意味においてである。もっと簡略化し、より具体的にいえば次のようになる。直観において多様なものが、一つの表象として一つの像をつくりあげること、それがさらに概念となつてとらえらるべきときの働きがまさに想像力「構想力」なのである。また逆に、概念を直観化し、具体的に表象することも想像力「想像力」の働きなのである。そのさいカントが挙げているのは三角形の例（A124）である。概念としての三角形が直観的には図形として三本の直線によって囲まれたものとして、また三つの角をもつものとして具体化されるからである。そのように想像力「構想力」は、直観と概念の双方にかかわりをもちながら、いわば二つの仕方で機能するというのが、ここの関連における要点である。

以上のことから、また判断力（その１）の合目的性の概念から明らかなことは次の二点である。第一は目的論的判断力では「合目的性」の概念は格率として、あるいは統制的原理として、その原理を手がかりにして客観のうちに、合目的性な関連を見いだそうとするものであるから、なるほど、格率としてその原理の出处は認識する主観の側にある。その意味でその原理は主観的といえる。しかしそれが機能として「描出」として具体的な関連が客観のうちに見いだされたとするならば、ある意味でその合目的性は自然の形式として、客観そのもののうちにあったのだとも考えられる。それに対して美感的判断力における合目的性は全く事情を異にする。確かに快の感情を触発するものは、対象（客観）のなんらかの形式にあるが、基本的には快を快として受け取る主観の側にその美感的判断力の根拠があるからである。これはすでに示したことだが、この考え方はまた美感的判断力において、それは結局個人的判断になるのではないかとの主張ともなる。それに対してカントはそうではなくて、かえって一般性を主張できるとしたこと、そしてその根拠は、この判断において、合目的性の概念が、なんらかの仕方で悟性と関連すること、合目的性が悟性を関連するかぎりにおいて、一般性が主張されるということなど、すでに（その１）で指摘

物のうちにも、合目的性を認めようというわけである。いやこれは正しい表現ではないかもしれない。上述のことから明らかなように、逆である。かえって有機体のうちに認められるある合目的性を、自然全体の合目的性へと拡大することに、目的論的判断力の働きがあるからである。この小論ではそのことに関して論ずるのが目的ではないが、一つの先取りした結論をいえば、カントの考え方は一つの全体としての有機体のうちに、合目的性を認めないわけにはいかないとの現実の認識を踏まえ、かえって自然全体のもつ合目的性を認めようとする考え方にあると理解したほうがよい。もちろんそれは構成的原理のような強力なものではなく、やや弱い仕方つまり統制的原理によって、このことを認めようというのである。とすると目的論的判断力における「描出」とは何か。描出が合目的性の概念に直観を添えることにあるとするならば、それはその合目的性の概念に基づいて、具体的にそのような合目的な関連を自然のうちに見い出すこと、あるいは自然全体の関連そのものを見い出すことを意味する。従って、目的論的判断力における「描出」とは、自然のうちに、あるいは自然全体そのものに、合目的な関連を具体的に発見することに尽きるのである。それではそれに対して美感的判断力、つまり芸術に関してはどうか。

芸術の場合には、想像力〔構想力〕によって合目的性が表象される。それはすでに述べたように主観的形式的な合目的性ではあるけれども、あらかじめ把握された合目的性の概念を実現することにある。すなわち「合目的性の概念に直観を添える」との意味が美感的判断力において「私たちにとって目的である、ある対象に関するあらかじめ把握された概念を実現する」ことの意味に変えられている。おそらくここでカントの念頭にあったのは、「描出」とは芸術の創作活動であり、それこそ「描出」の基本的意味だといったかったわけだろう。「判断力」（その1）で述べたように美感的判断力における合目的性の概念は、目的論的判断力のそれとは異なる。目的論的判断力においては、ある全体として統一ある相互関係を意味する概念であるが、美感的判断力においては、快という主観的感情を説明するための概念であり、その意味で私たちには与えられているのは、合目的性の概念ではなく、「快」の感情なのである。すなわち「快の感情」が直接的に与えられていて、その快をひきおこす原因として、認識論的意味において対象と主観との間に、すなわち、対象の形式と主観としての認識諸能力との間に、合目的性を考えようというのである。従って、対象のうちになんらかの合目的性があることを認めるといっても、どのような対象のあり方（あるいはどのような対象の形式）が快をひきおこすかを全く規定することはできない。いいかえれば、どのような対象形式が認識能力と合致して合目的性をひきおこすかを規定できないのである。明らかなことは「快の感情」があったということ、それは対象の形式と主観の諸能力との間に合目的性が成立した結果だとみるわけである。そういった意味での合目的性が、美感的判断力における合目的性なのである。だからこそ、この合目的性を「実現する」が重要な意味をもってくる。芸術に関していえば、快の感情は合目的性を実現された結果として、基本的には創作活動において表れることになる。そこでは想像力

今まで述べられている限りでいえば、認識（認識能力が及ぶ範囲が認識と考えられるので、カントの「表」におけるように認識能力といっても同じこと）に関して次のように「認識」の概念の外延を整理できよう。もっとも狭い意味の「認識」とは基本的に悟性によるもので、（もちろん直観の助けを必要とするが）これが通常の経験的認識。そしてその悟性による種々の諸認識をふまえて、あるいは種々の経験的諸認識をふまえて、さらに自然全体が統一あるものとして、そこに合目的性が認められるとするならば、それは自然全体という特殊的認識ではあるが、「認識」という概念の外延は拡張される。つまり認識能力としての判断力のうちの目的論的判断力がつけ加わることになる。ここまでは認識としては本来的に客観そのものを対象とするがぎり、自然認識の領域といえる。さらに人間の快・不快の感情に基づくと思われる美も、たとえば芸術の創造や鑑賞も広い意味で人間の認識（明らかに狭い意味の認識とは異なるが）とみなすならば、認識の外延はさらに拡張されて、能力としては美感的判断力がつけ加わることになろう。いま問題になっている「認識」の外延はここまで十分であるが、さらに人間の行為（その行為の動機は自由にもとずき、自然必然の領域とは全く別と考えられても、その行為の結果は自然必然の領域にあらわれるものであり、また人間の行為はそのことを予想して為されるのであるから）も広い認識のもとに成り立つと考えるならば、「認識」の外延はまたさらに拡大される。そしてすでに示した「表」に行き着くことになる。なぜならそこでは認識能力とは悟性、判断力そして理性を含んでいるからである。

再び「描出」に関するカントの考え方を概観することに戻ろう。引用文における「認識のために」の「認識」とはそれだから少なくとも美感的判断力を含む領域まで広げられた意味であることは明白である。引用文より「描出」とは、従ってこの「広い意味」の認識のために、合目的性の概念が使われることになるが、そのとき判断力の仕事はこの「描出」にあること、いい換えれば、この合目的という概念に対応する一つの直観を添えることにある。判断力のなすことは具体的に合目的性をもつ事象を直観的に示すこと、だから「描出」とはそのような判断力の具体化を意味し、合目的性というたんなる概念ではなくて、合目的性を含む具体的なものの表示を意味する。カントは要約するならば美感的判断力にさいしても、目的論的判断力においても同様にこのことが起こることを述べて次のようにいう。芸術の場合には私たち自身の想像力〔構想力〕によって、このことが生じ、そのときには私たちは、ある対象についてあらかじめ把握された〔合目的性をもつ〕概念を実現すること *realisieren* にある。（有機体のように）自然の技巧においては自然によってこのことが生じ、そのときには私たちは自然の産物の判定のために、目的についての私たちの概念を自然の根底におくのであり、この後者の目的論的判断力の場合には〔有機体のように〕ある事物の形式のうちだけに、自然の合目的性が表象されるばかりでなく、この自然の産物が自然目的として表象される、と述べる。つまり目的論的判断力においては、自然の合目的性を自然全体そのもののうちにも認めると共に、有機体のようにある一つの事

で、それは「あらゆる概念に先だって」表象される。ここであらゆる概念に先だって、vor allem Begriffeとは、この合目的性の表象が直接的になんら概念を伴わないこと、つまり経験的認識となる類のものでないことを意味している。その二は客観的根拠に基因するもので対象の形式と諸物自身の可能性とが一致して、合目的性が表象されるのであり、その場合、諸物に関する「ある概念に従う」のであるが、その概念に先行して、かつ、この形式の根拠を含んでいるのである。ある概念に従う nach einem Begriffe とは「合目的性」の概念に従うこと。その合目的性の概念が先行して、この形式の概念を含んでいるとはこの合目的性の概念は客観的な対象そのものからそのような概念が生じたのではなく、私たちがその概念を格率としてひきこみ、あるいはそれを前提することによって、客観的对象のうちに、そのような合目的性な関連を見い出すことを意味する。すでに私たちは「合目的性の概念」のところで論じてきたことから、前者が美感的判断力、後者が目的論的判断力によるものであることは明白である。カントも第一番目の合目的性の表象が、直接的な快にもとづくこと、その表象は諸物に即した快の感情とかかわりをもつこと、それに対して第二番目の合目的性の表象は、与えられた概念の下に対象のある一定の認識にかかわるものであること、いいかえれば、諸物を判定するさいには感情ではなくて、悟性にかかわりをもつものであることを述べている。そして問題はこれからである。カントは次のようにいう。「或る対象についての概念が与えられると、認識のためにこの概念を使用するさいに判断力の仕事は描出 (exhibitio) にある。すなわちその概念に対応する一つの直観を添えること dem Begriffe eine korrespondierende Anschauung zur Seite zu stellen にある。」^(XLIX C261-262) という。ここだけを読むと自然の客観的実在的合目的性だけを言っているようにみえる。また認識に関してだけ言及されているのでそれに続く文章を見ると目的論的判断力だけが問題であるように受け取られる。しかし描出が美感的判断力にもおよぶことが明白になる。ここの引用文中の「認識のために…」という言葉も読みすすむと広い意味で使用されていて、単に認識能力という悟性ばかりでなく快と不快の感情としての判断力も、さらに広くすれば欲求能力としての理性も含めて述べられている。それは「判断力」(その1)の最初の表を参照していただければ、そのことはより明白である。しかし、ここには確かにカントの認識の概念の拡大がある。従って認識能力を狭い意味にとれば悟性だけを意味し、それを広い意味にとれば悟性ばかりでなく、判断力も理性も入る。判断力に関していえば快・不快の感情もある種の認識の結果に対する反応でもあるので、広い意味で認識と関連づけることができる。自然全体が合目的な関連をもつということは自然全体そのものに関する一つの特異な認識ではあるにしても、やはり自然認識の一種でもある。やや横道にそれるがここでも少し、カント哲学全体における「認識」の意味をざっとみておこう。それは一つはカントの第三批判では第一批判と比較するときつねに概念の拡大による意味の変化があることを示しておきたいこと、そしてその拡大がどのようなものであるかを見極めておきたいからでもある。

第三批判の「判断力」(その2)

——「描出」「反省的判断力」の概念——

細 谷 章 夫

この小論に先立つ(その1)では、美感的判断力と目的論的判断力の共通点に力点をおくカントの叙述に従い、「合目的性の概念」を取りあげた。私たちはさらに「描出」die Darstellung および、「反省的判断力」die reflektierende Urteilskraft の概念についても同様に両判断力の共通点を示していくことにする。

「描出」die Darstellungの概念

「描出」die Darstellung (exhibitio) の概念が「序論」にあらわれるのは、「8、自然の合目的性の論理的表象について」の章においてだけである。その意味で「合目的性」の概念が判断力全体におよぼす強力な概念であるのに対して、弱い概念と言えるかもしれない。しかし私の考えによれば、この「描出」の概念はどちらかというとき美感的判断力において重要な概念であるように思える。

事実「描出」は、判断力批判の「第一部、美感的判断力の批判」ではかなり頻繁にでくくるが、「第二部、目的論的判断力の批判」ではほとんど出てこないからである。それなのにカントは「序論」のこの章で、明らかにこの概念が両判断力にかかわることを示している。したがって、私たちはそのカントの主張にそって、そのかかわり方の意味を把握しておく必要がある。それは簡略なものだとしてもそれを示すのがここでの一つの仕事である。も一つは「描出」の意味を「第一部、美感的判断力の批判」の部分も援用して、さらに明確にしておくこともここでの目的となる。

そこでまず、カントの主張の一つの結論をあらかじめ述べておこう。それは、目的論的判断力においても、美感的判断力においても共通な「描出」の意味は、一言でいえば、「合目的性の概念に直観を添えること」にある。それでは目的論的判断力において、合目的性の概念に直観を添えるとは何か。また美感的判断力において、その概念に直観を添えるとは何か。それぞれの判断力の特性によって、その意味は異なってくるからである。以下この8章の「描出」の部分に解釈を加え、また補足、要約しつつ概観しておくことにする。

カントによると経験において与えられた対象によって、二つの仕方で合目的性が表象される。その一つは、ただ主観的根拠に基因するもので、対象の把握 Auffassung (Apprehensio) において、その対象の形式と認識能力とが一致して、合目的性が表象される場合